



両界山横蔵寺略縁起

伝教大師・最澄は、比叡山の持命仙人が天竺から持ち帰った赤檜種の木で根本中堂の本尊を彫り、余材で尊像をつくり、それを祀る場所を求めて諸国を巡っていました。当地に至ったとき、三輪次郎大友藤原助基という老人に出会い、稲小屋に泊めてもらうことに。翌朝、最澄が山道を歩いて行き、大岩のところで尊像の入った笈を立て、ひと休みしていると、尊像が縁に臥せてしまい、起こそうとしてもびくともしません。「この山中にとどまりたいというのが私の意志であれば、ここに安置しましょう」と最澄が言うと、尊像は自ら起立しました。最澄と老人は翌朝から尊像を祀る場所を探すことになりました。ある晩、助基に夢告があり、「四方の山が両界曼陀羅の構えで、中央が月輪に似た霊地がある」と告げられました。二人は翌日、夢告どおりの霊地を探し当て、その地を平らにし、菅でふいた草堂を建て如來を安置しました。山の形と尊像が横臥したことから、これを両界山横蔵寺と名付けたいといわれています。

舍利仏と瑠璃殿拝観料

大人 500円 小中学生 200円 幼児 100円

拝観時間 10:00~16:00

※瑠璃殿 12/1~3/31 休館



谷汲桶

背に負ったシナイを揺さぶり、脚先の大太鼓を轟かせ12人の太鼓打ちが豪快に踊ります。岐阜県重要無形民俗文化財第1号。

谷汲への交通のご案内

- 車での所要時間
 - (谷汲山華嚴寺) ●東海環状自動車道「大垣西」インターチェンジより25km・40分
 - 名神高速道路「岐阜羽鳥」インターチェンジより30km・45分
 - (両界山横蔵寺) ●両界山横蔵寺より8km・10分
- 駅からの所要時間
 - 大垣駅 (40分) 谷汲口 (朝日町バス・F74/V3) 谷汲 (博見線)
 - 大垣駅 (25分) 谷汲 (東毛線) 揖斐駅 (朝日町バス・F74/V3)



【お問い合わせ先】 揖斐川町観光プラザ

岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲徳積175-4 / TEL (0586) 65-2020
HPアドレス / <http://www1.town.ibigawa.lg.jp/kankoujyouhou/>

谷汲山 華嚴寺 横蔵寺 両界山



揖斐川町谷汲



谷汲山華嚴寺略縁起

華嚴寺の創建は延暦17年(798)とされ、次のような縁起が残されています。
奥州会津黒河原に矢口大領という人がいました。十一面観音を建立したいと強く願い、京の有名人の僧に彫り上げてもらったところ、観音像は仏師が差し出した藤蔓の杖をついて歩き始めました。途中、美濃国赤坂まで来ると「この北方の山中に有縁の地がある。そこで衆生を済度する」と語られると北に向かわれ、華嚴寺の南にある丸山の麓で足を止められました。そこで大領は丸山の頂にお堂を建て、そこへ観音像をお祀りしました。

その後大領はそのころ山中で修行していた豊然上人と協力して山を切り開きそこに寺を建てたのが現在の谷汲山華嚴寺です。このとき、近くの岩穴から油が湧きだし、燈明に困ることがなくなりました。

この話を聞かれた醍醐天皇から谷汲山の山号と華嚴寺の扁額を賜ったといわれています。山号は湧き出した油を汲んだことに、寺号は観音像に華嚴経が写経されていたことになんたとされています。

和の情緒と文化が共存する場所。

伝教大師が自作の兼宗如來を祠った横蔵寺。その如來像をはじめとして22体の国の重要文化財が安置され、その他にも多くの仏像や絵画・書籍を蔵しています。この文化の香り高い寺の別名は「美濃の正倉院」。古来の人々の技術や文化を知るために、また紅葉の時期に見られるような美しい四季の姿を求めて大勢の方が訪れます。

谷汲山 華嚴寺 横蔵寺 厩界山

古来の面影を残し、歴史へと誘う場所。

西国三十三番清観霊場として知られる華嚴寺。1200年の歴史をもつ天台宗の由緒あるお寺です。本尊である十一面観音像をはじめ左の不動明王、右の毘沙門天など、重要な文化財を数多く安置。歴史への旅ができるほかに、桜の春、紅葉の秋と四季折々の表情を見せて参拝客を楽しませてくれます。

木造毘沙門天立像

菅原道長の手から迎り出されたこの立像は、高さ166cmの尊身像で柳の一本通りです。強い意志が張りつめる凛とした風格と、堂々とした体付きからあふれ出る眞實感が見るものを圧倒。また衣のひだに見られる明確な刀法などに平安時代の作風が顕著に表れています。



三十三所巡りの始まり

西国三十三所巡礼の始まりは、養老2年(718)、大和長谷寺の徳道上人に「頼める衆生を救うため、三十三ヶ所の中で困難大王に「頼める衆生を救うため、三十三ヶ所の願所廻りを広めよ」と告げられました。奇蹟的に歸った上人は、近畿地方の寺々に三十三霊場を認定し、巡礼に出たのです。しかし、実際に三十三所巡りが盛んになつたのは、それから2世紀後の平安時代中期です。徳道上人の語を聞いた花山法皇がみずから三十三霊場を歩みだしたことに由来します。

刹那の歴史を永遠に残して...

木造十二神将立像

平安末期から鎌倉初期にかけて作られたと考えられている十二体の神将。高さ90cmの常木造りの立像で、いずれも天衣と甲冑をつけた武将の姿をしています。薬師如來を囲むように十二支(干支)の冠をつけるように。薬師如來を信仰する人々を守るといわれています。



妙心上人の舍利仏 (ミイラ)

学会でも謎とされている昔和帝のミイラ。妙心上人は天明元年(1781)に横蔵に生まれ、仏道修行のため巡礼の旅に。文化12年に御正体山の清観で断食し、入定されました。人工の手を施さず現世に至っており、上人の信仰の厚さが伺えます。



笈擲堂

西国三十三所を運歴してきた巡礼者は、谷汲山で粥餅打ち止めとして、その証に笈擲を物めていきます。花山法王が「今までは、観と頼みし笈擲を履きながら、美濃の谷汲」という詠歌をたどられていました。山のように頼み重ねられた幾千もの笈擲に、信仰深い巡礼者の想いを感じ取ることができそうです。



谷汲山華嚴寺の鯉

三十三所をめぐる歩いた末、谷汲に届って本堂向拝の柱に打ち付けてあるこの鯉を撫でると精進落となつたといふ、古来の習習があります。



谷汲山本堂

延暦17年の創建と、1200年もの歴史をもつ西国三十三番清観霊場。寛武元年の足利の乱にて焼失してしまいましたが、幸いにも本尊だけは無事でしたが、度重なる兵燹で彫刻の一途をたどる本堂を敷いたのは道徳持親上人、霊夢を感じた上人は、文明11年に再興しました。その後また大焼したため、明治8年に薬師法が再興の願主となり、明治12年には全てを完備。現在までその姿を留めています。



木造深沙天将立像

両手・両足に巻きついた蛇、突き出した眼珠など、異国的な風貌をしているこの像は、平安時代中期に柳の一本通りで作られました。玄奘三蔵がインドへ仏典を求めて旅をする途中、砂漠の中で災難にあつた時、空を飛んで降った神、「面燃迦」の沙悟浄と



木造大日如来坐像

高さ68cm、柳の常木造りのこの像は、平安末期の筑前講師の作品。密教の最も重要な如来・金剛界の大日如来で、手は智拳の印を結んでいます。中央の仏師の手から生まれた優美な彫像は、一見ほっそりとして穏やかな印象を与えます。もとは三重塔に安置されていました。



横蔵寺三重塔

江戸時代初期、4年の歳月をかけて寛文3年(1663)に完成した三重塔。方三間の和風で装飾が多く、上方への落ちも少ない、輪皮障の優美な造物です。イソフのストゥーパに始まる仏舎利を軸としたのですが、最近まで大日如来坐像を安置していました。障やかまこの塔には歴史の面影が深っています。

